

藝文

第拾九年第參號

ツの假名の古音を考ふ

大 島 正 健

左佐は現代音 tsu 又 tsu なり。韻鏡にては兩字齒頭音精母に屬し、同じく tsu の音なりしが如し。其古音も之と同音と推察すること妥當の見解なるべし。嗟嗟は現代音 tsu 又 tsu なり。兩字齒頭音清母に屬し、同じく tsu の音なりしが如し。其古音も推して同音なりしものと定む。我方にては古今此四字をサの假名にて寫し來る。作の唐代音は tsu なるべけれど、之をサクと爲し、草の唐代音は tsu なるべけれど、之をサウに作り、其兩字の尾音を切りて、之をサの假名に用ゐたり。既に我方にてツの假名を以て tsu の音に當てたるものとせば tsu の音を寫し得ずして、特に之と響を異にする細齒音の s に該當するサにて寫したるは、甚だ理會に苦しむ所なり。されど古

音には *ㄆ* の音無かりしに由り、止むを得ずして、之をサの音に移したるなりと言は、其れ迄の事なり。古人の發音はいざ知らず、我等現代の關東者には、言の中又下に在りては、上の音の勢に驅られて、此音を發し得ること通常の事なり。爺(ヤ)サンをトツアン(*to tsan*)打裂羽織を、ブツツアケバオリ(*bu tsake baori*)搔裂をカツツアク(*ka tsu-ak*)と言ふが如し。我が流麗なる古代の大和語には、或はかくの如き蠻音は存じ居らざりしことなるべし。

祖、曾、宋の *ㄆ* をソの假名にて寫したるは *ㄆ* をサにて寫したると同様なり。齊制の *ㄆ* も亦セに作れり。

ㄆ の拗音の *ㄆ* は如何に寫したるか。瑤鏘は唐代音にては *tsyang* なりしが如し。入聲瑤々は鈴の音の *tsyang byang* (ツヤングツヤング) 又鐵中の鏘々たる者は鐵の音の *tsyang tsyang* (ツヤンタツヤング) にして、共に實物の音に近きこゆ。我方にては瑤鏘の兩字共に漢音シヤウ吳音サウなり。吳音の方は本音に遠きが故漢音の方を取れば、瑤々鏘々はシヤウシヤウ即ち *shang shang* と爲りて、面白からず。當時我方にツの音ありたりとせば、無論ツヤウツヤウ即ちチャングチャングに近きツヤングツヤングの方を用ゐたるなるべし。支那にても宋以後の音にては正齒音の *ㄆ* は、舌

上音のマ又はㄹに轉じて用ゐ來れり。詩經に見えたる伐木丁々の丁に對して、吳才老の韻補に従へる宋氏の註に音爭とあり。一方にては丁は竹耕切とあり、他方にては音爭とありて、大に本邦の學者を惑はし、或はタウと讀み或はサウト解したるが、何れも、伐木の聲に當らず。竹耕はチクキヤウにて、兩音は拗聲なれば、其歸字の音はチャウ即ちチャング (chang) と爲るなり。爭は我方に漢音サウ吳音シヤウなれど、其實は正齒音照母に屬して tsyang なり。南宋の時代には、正齒音照母の tsy は舌上音知母の ts 又 ts に移り居りたるなり。我方にて tsyang サウ又シヤウにて表はしたること、其本音に遠しと謂ふべし。伐木丁々は伐木チャングチャングなり。

支、枝、旨、至、之、志を古來我方にてシの假名にて寫せり。右の諸字の唐代音は syi にて、現代音は si なり。眞軫震のシンに對する唐代音は si 現代音は si なるも、亦是に同じ。子のシに對する唐代音の si の現代音 si に化するが如く、津のシンに對する唐代音の si は、現代音にて同一にして、頭音の s は共に保存せらる。初處の唐代音は syo にして、現代音は si なれど、我音は si なり。朱主の唐代音は sya にして、現代音は si なれど、我音は si なり。我方に s の音無かりしとせば、sy をシに移したること、外に適當の法無かりしに由るべし。

我古音に我現代音の如きツの音の有無の問題を決するは、直接に之に當るべき音を取りて考査するにあり。諷は韻鏡にては齒頭音精母に屬し、其唐代音 g に當り、現代音も亦之に同じ。然るに此字我方にては諷訪の s なり。趨は齒頭音清母に屬し、唐代音 h に當り、現代音も亦之に同じ。然るに此字我方にては s の音にて慣用せらる。莠は s の假名に用ゐらる。聚は齒頭音從母に屬し、唐代音 p に當り、現代音は ts なり。此字 z の假名に用ゐらる。寸の唐代音は ts に當る。其轉音は ts なるべく、我方にて之を ts の音にて寫し得たるべきに、之を sn と呼ぶ。右の諸例は韻鏡を基として、唐代音に擬したるが、支那の古代の音も、大要は相似たるものなるべし。

上記の變化を基として考察を下せば、下の如き結論に到達すべし。我古音のツに、現代常呼の音の如く、 ts の響ありたりとせば、何を苦しんで、支那の齒頭音の h に對し、特に之を細齒音の s に移して、 s 音の假名を用ゐたるべきか、又之と反對に我 s 音に對して、 h 音の漢字を用ゐたるべきか、是れ取りも直さず古代我方に h 音の存在せざりしを立證するものなり。

然らば我古音のツに當てたる漢字は如何ん。古書に見えたる清音の者は都、兎、屠、

通等濁音の者は豆、逗、頭、途、圖、徒等にして、純然たる舌頭音の者大多數を占む。是れ清音はㄐ濁音はㄑに當るなり。此音今尙九州地方の口語にて親しく耳にする所なり。tu, du の tsu, dzu に變はり來りたる時代及び地方變化に至りては未だ之を詳かにせず。

ベネテツト・クローチエ 原著ダンテ

地獄篇 (二)

大賀壽吉
黒田正利